

奈良県立畝傍高等学校  
創立120周年記念誌



奈良県立畝傍高等学校

奈良県立畝傍高等学校

創立120周年記念誌



奈良県立畝傍高等学校









# 校歌

作詞 北見志保子  
作曲 平井康三郎

一、大和平野のあさばらけ  
正気は澄みて清唱の  
声はわれらの胸に燃ゆ  
畝傍の山の緑濃く  
学ぶわれらに希望あり  
訓へは崇し畝傍高校

二、麦生ひらけて紅梅の  
くれなゐにほふ春霞  
夢こそ育て青春の  
妙なるしらべ学窓に  
よき師の訓へに文化河  
学びたたへむ畝傍高校

三、自治の精神上代より  
つたえてここに千余年  
伝統まもれや民族の  
誇りは若きわれにあり  
たかき使命を果すべき  
若うどわれら畝傍高校

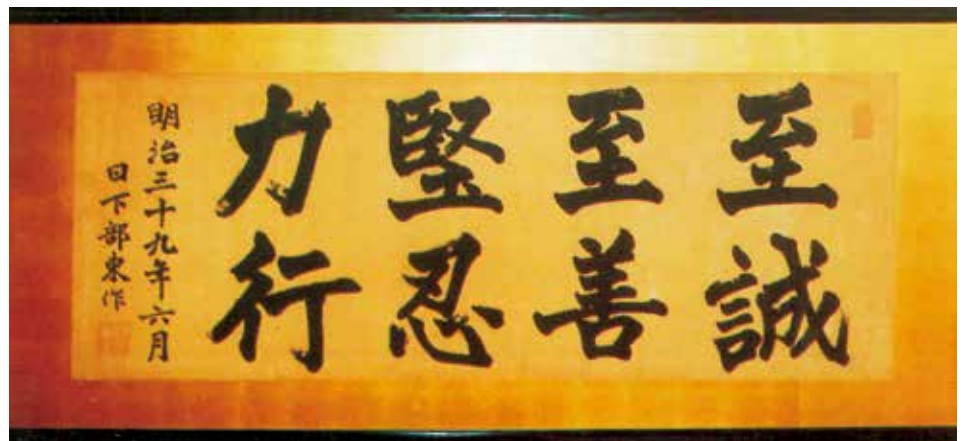


校章



校旗

校訓



# c o n t e n t s

- 4 ● 畝傍高校の四季点描
- 5 ● 校歌・校章・校旗・校訓
- 7-11 ● 挨拶・祝辞
- 12 ● 歴代校長
- 13-20 ● 120周年記念事業
  - 14 ● 記念標語・シンボルマークほか
  - 15 ● 記念賛歌
  - 16-17 ● 120周年記念式典
  - 18-19 ● 記念講演
  - 20 ● 記念演奏
- 21-41 ● 10年間をふりかえって
- 42-43 ● 10年間をふりかえって（定時制）
- 44 ● 生徒会の活動
- 45-62 ● 学校組織各分掌
- 63-87 ● 部活動
- 88 ● 編集後記



大和三山を望むここ橿原の地に、明治29年、本校が奈良県尋常中学校畝傍分校として発足してから120年の歳月が流れました。明治32年には分校を改め、奈良県畝傍中学校となり、昭和8年に本館校舎が竣工し、県中南部の中等教育の中核として歴史を刻んでまいりました。戦後は、男女共学制の奈良県立畝傍高等学校となり、平成16年の耳成高校との統合など、幾多の変遷を経て今日に至っています。

これまで多くの若者たちが、希望を抱き、高い使命を果たすべく、切磋琢磨しながら、自由闊達な青春の日々を謳歌し、文武両面に優れた実績をあげてこられました。校訓の「至誠、至善、堅忍、力行」は、卒業生の心に深く刻まれ、その後の各々の人生の指針となり、人生の節目節目でよき道標となっています。また、平成24年に文化庁から登録有形文化財として指定を受けた本館校舎は、昭和初期を代表する歴史的建造物として、在校生、卒業生や地域の方々から愛され大切にされてきました。

現在、畝傍高校は平成26年度より文部科学省からスーパーグローバルハイスクールの指定を受け、世界を舞台に活躍できる創造的で活力のある生徒の育成を本校教育の一つの大きな柱とし、アクティブラーニング型の授業実践などたゆまぬ指導研究に取り組んでいます。時代に即応した先進的な教育課程の編成、そして、月2回の土曜授業の実施や様々な講習等の実施による生徒へのきめ細かな教育環境の提供など、歴史と伝統を受け継ぎつつ新たな一歩を踏み出しています。

また、部活動に目を向けますと、生徒の多くが所属し、自主的な活動に若いエネルギーを注ぎながら、感性を磨き、心身を鍛え、日々の学校生活を充実したものにしてきています。それぞれの部で素晴らしい成果を上げており、全国大会、近畿大会にも多くの文化部・運動部が出場しています。とりわけ、創立120周年の記念の年に、畝傍高等学校の名を全国に轟かせてくれた、音楽部の「NHK全国学校音楽コンクール」全国大会出場は、東京渋谷のNHKホールで行われましたが、生放送で全国にその美しい合唱と共に「創立120周年を迎える歴史と伝統のある高校」として紹介されました。

さて、今日の社会はますます変化の激しい、先行き不透明なものとなりつつあります。平成28年10月27日の記念式典では、幸いにも創立120周年という記念すべき年に居合わせた私も生徒、教職員が多くのご来賓ご臨席の下、改めてこれまでの120年の歩みをしばし振り返り、畝中・畝高にかかわってこられた多くの先輩方のご苦勞に想いを馳せました。120周年記念標語の「受け継がれる伝統 創り出す未来」にあるように、「歴史と伝統」を受け継ぎ、時代の風を受け止めつつ今を生き、未来に向かって本校の更なる発展を互いに誓い合う一日と致したところです。

最後になりましたが、これまで本校の教育活動に多大のご理解とご支援を賜りました関係各位に重ねて厚く御礼申し上げますとともに、一層のご指導、ご鞭撻をお願いし、ごあいさつとさせていただきます。

## 畝高120周年に寄せて



畝傍高等学校校長  
浅田 重義





このたび県立畝傍高等学校が、創立120周年を迎えられ、記念誌を発刊されますことを、心よりお慶び申し上げます。

藤原京から延びる二つの官道、横大路と下ツ道の交差する辺りは、かつて交通の要衝として栄え、多くの外交使節が通ったという万葉の息吹に包まれた地に貴校はあります。まさに「文化のクロスロード」に、明治29年、奈良県尋常中学校畝傍分校として創設され、爾来120年、県民の期待を担い続け、「至誠 至善 堅忍 力行」の校訓の下、輩出された有為の人材は3万8千人を超え、広く社会の発展に貢献してこられました。この歴史と伝統をつくりあげたのは、歴代学校長をはじめとする教職員の熱意と、関係する皆様方の温かい御支援、並びに、生徒の皆さんの努力と大きな志です。

さて、現代社会はグローバル化が進み、絶えず流動的で見通しのきかない不透明な時代です。このようなときこそ、私たちは、知恵と勇気と不断の努力をもって進んでいかなければなりません。「教育は百年の大計」という言葉がありますが、これは、中国春秋時代の『管子』に、「一年の計は、穀を樹うるに如くは莫し。十年の計は木を樹うるに如くは莫し。終身の計は、人を樹うるに如くは莫し。」とあることからきています。一生涯の計画として、先の百年を見据えた大方針を立てて人材を育成するという発想は実に壮大で、見習うに足るものです。今こそ、百年の大計を立て、時代の荒波を乗り越える若者を育てなければなりません。

そこで、奈良県では教育の現状と課題を明らかにし、基本理念と目指す人間像を共有し、具体的な取組の方向性を打ち出すべく、平成28年3月に「奈良県教育振興大綱」を策定しました。社会が求める人間像が刻々と変化していく中で、「自他を尊び、地域を尊ぶ人」「確かな学力、豊かな人間性、たくましい心身を備えた人」「自立し、主体性をもって行動し、協働して地域・社会に参画する人」「創造性を発揮し、世界に伍して活躍する人」を育てるための大きな計画です。これにより、中長期的な視野に立ち、教育課題の解決及び教育の振興を図っていきます。

古代の「文化のクロスロード」に校地を構える貴校が今、文部科学省のスーパーグローバルハイスクールの指定を受け、世界のグローバルリーダーを育成されていることに、不思議な縁を感じるとともに、大いに期待しています。創立120周年をひとつの節目として、今まで培われた歴史と伝統の上に、来たる100年を見通して、文化の香り漂う高度な教育活動を展開され、今後も、優れた人材の育成に邁進されますこと、また、次代を担う若い皆さんには、高い理想と大きな志を掲げて立派に自己実現を果たし、輝かしい未来に向かって、世界をリードするグローバルリーダーとして活躍されることを希望するところです。

最後に、変わらず学校を見守ってくださる卒業生や地域の皆様に感謝申し上げますとともに、今後も本県教育を先導する学校として、更に大きな一歩を踏み出されることを祈念して、私の祝辞といたします。



奈良県知事

荒井 正吾

## 畝傍高等学校120周年を祝して



この度、県立畝傍高等学校が創立120周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。また、その節目に合わせて、記念誌を編纂、発刊されることは、誠に意義深いことと存じます。

本校は、明治29年に奈良県尋常中学校畝傍分校として開校されて以来、県内屈指の伝統校として、「至誠 至善 堅忍 力行」の校訓の下、豊かな文化の創造に寄与する、知・徳・体の調和のとれた心身ともにたくましい生徒の育成を目指され、大きな成果をあげてこられました。昭和8年に創建され、その長い歴史に寄り添う校舎は、生徒たちの精励奮闘ぶりを温かく見守り、激動の昭和史をくぐり抜けて、今もなお優美な姿を留めています。平成24年には、昭和初期を代表する歴史的建造物として国の登録有形文化財に指定され、近年、映画やドラマの撮影にも使われました。この学び舎に象徴される本校の輝かしい歴史と伝統は、大切につながれて今日に到ります。これらは、歴代の学校長をはじめとする教職員の愛情に満ちた御指導と生徒の皆さんの弛まぬ努力、また育友会、同窓会等各位の惜しみない御支援の賜物であると、深く敬意を表します。

さて、近年のIT技術の急速な進歩は、社会・経済・文化等の様々な分野でグローバル化を促進し、私たちは、日本対外国という二元的な発想から、地球単位で世界全体を見る発想や視点、行動に転回することが求められています。丸い地球がフラットな世界に変わりつつあるこれからの時代を生きる人材の育成には、グローバル教育を推進し、個々の生徒をグローバル化することが必要ではないでしょうか。個人をグローバル化するとは、単に外国語の能力を高めるにとどまらず、世界全体としっかりと向き合い、世界のすべての現実を背景とともに受け止め、世界のすべての人を対等で平等な存在として見るスケールの大きな心を持つこと、すなわち「グローバルマインド」を心に設定することが基本となります。

そのような中、本校は、平成26年度から、文部科学省のスーパーグローバルハイスクールの指定を受け、新しい試みを開始されました。生徒に、社会的課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決能力等の国際的な素養を身に付けさせ、将来、国際的に活躍するリーダーの育成を図る取組です。これまで、大学との連携や質の高いカリキュラムの開発など体制整備を進められ、様々な現代的課題についての研究や討論などの実践を進めておられます。その集大成として、平成28年度には、テーマ別の研究発表、各国留学生との討論からなる「未来創造会議」を成功させ、目に見える成果を収められました。

世界全体は余りに広く、さらに急速に変化する世界全てを把握することは大変難しいことですが、生徒自らの眼と、三年間で身に付けたグローバルマインドで世界全体を見つめ、未来をも見つめることのできる力を具えたグローバル人材の育成を切に期待しています。

最後に、変わらず学校を見守ってくださる関係各位に感謝申し上げますとともに、さらなる御支援、御協力をお願いし、在校生の皆さんには激励と期待の言葉をお送りして、お祝いの言葉といたします。

## 畝高120周年に寄せて



奈良県教育委員会教育長

吉田 育弘



このたび、母校奈良県立畝傍高校が、創立120周年の慶節を迎えられましたことは、私たち同窓会にとりましても、この上ない喜びであります。

思えば120年間、母校は奈良県屈指の名門校として社会に有為な人材を輩出して参りました。母校が創設された明治29年は第一回の近代オリンピック大会がアテネで開かれた年であり、東洋の小さな国であった日本が、欧米列強に負けじと坂の上の雲を見上げて懸命に努力していた時であります。この大和の地からも国家や社会を担う有為な人材を育てるべくこの学校は創設されました。期待に応え、以来、幾多の優れた人材を輩出し120年の伝統を築いて来られました。現在も地域のために、あるいは全国的に、さらに世界的に多くの卒業生が活躍しておられるのはご高承の通りです。

これも歴代校長をはじめ、教職員、生徒諸君、保護者、同窓生、そして地域の方々をはじめ行政や関係機関各位の絶大なご尽力のおかげと改めて感謝申し上げる次第です。

母校の輝かしい歴史は、私たち3万8000人の同窓生の誇りでもあります。そして伝統を停滞させることなく、さらに進化させ次世代に引き継いで行くのは、私たち今に生きるものの責任であります。

これからの21世紀は激動の難しい時代になるでしょう。しかし母校の卒業生は校訓を胸に自信と誇りを持って一人一人が、かけがえのない存在として生き抜いてくれることと信じています。

私たち同窓生も心から母校を応援したいと思い、「奈良県立畝傍高等学校創立120周年記念事業募金」を呼びかけ、多くの方々からお心のこもった拠金を多数お寄せいただき、母校を思う熱いお志に深い感銘を覚えております。

この基金は、120周年記念事業をはじめ、母校が取り組んでいるグローバル人材育成などのために有効に使わせていただきます。また御芳名はこの記念誌に掲載し後世に伝えることとしております。

この120周年の慶節を機に、心を新たに、ますます母校が輝かしい未来を創り出して行かれることを期待いたしますとともに、会員各位のご清祥を祈念申し上げます。



金鷲会会長  
堀井 良殷

## 畝傍高等学校120周年を祝して



畝傍高校が創立120周年を迎えられますことに、心よりお祝い申し上げます。

120年という長い歴史をもつ畝傍高校で、近年よく耳にするのが「進化する伝統」という言葉です。

私を含め、畝高卒業生には、畝高をこよなく愛してやまない方が数多く、卒業後も物心両面でのご支援がたえません。

その最たるものの一つに新館のデザインを挙げることができるでしょう。昭和8年に建てられ、現在は登録有形文化財となっている本館は、当時の奈良県による莫大な予算措置によって建設されました。しかしながら時代を反映して、新館増築の際には、一般的な高校の校舎となるところでした。そこを押して本館と同じデザインで、規格外に高い天井の新館を、破格の予算で増築していただくに当たっては、多くの卒業生諸氏の働きかけがあったと聞き及んでおります。

そこにある、畝傍高校を愛し、かけがえのない青春のモニュメントとしての校舎、誇りある学校の雰囲気大切にしたいという強い思いに心打たれます。それと同時に、諸先輩方の思いに応えるべく、現在、畝傍高校に関わっている者は、学校と在校生のために何ができるのか、身を引き締めて考えてまいります。また、県民の皆さんからいただいた予算以上のものを、社会に還元すべく、努力してまいります。

大きな二つのシャンデリアを備えた講堂、金魚鉢と愛称された図書館などは今はなく、100周年事業で建てていただいた県下無二の文化創造館が、入学式から卒業式まで、現在の畝高生を見守ってくれています。

講堂解体前には、多くの卒業生があつまり、別れを惜しましました。図書館での思い出には皆さん事欠かないことでしょう。なくなったが故に、思い出を共有する卒業生が、繋がりをさらに深めるきっかけにできればと願っております。

長年慣れ親しんだ前期後期制は、スーパーグローバルハイスクールとして出発するに当たり三学期制へと変わりました。これからも、残るもの、消えるもの、様々ではありますが、卒業生一同、進化と伝統に彩られた畝傍高校で繋がり、その繋がりが、人生をよりいっそう豊かなものにしてくれることを願ってやみません。

最後になりましたが、120周年にあたり、多くの卒業生諸氏より、多分のご寄付をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

また、育友会活動にご支援、ご協力をいただいております校長先生はじめ先生方並びに会員の皆様に、心より感謝申し上げます。



育友会会長

堤 等

## 畝高120周年に寄せて



第31代校長



谷垣 暁弘

第32代校長



森本 重和

第33代校長



森田 眞康

第34代校長



福田 裕光

第35代校長



浅田 重義

# 創立120周年記念事業





創立120周年を記念して、標語・シンボルマーク・賛歌を広く全校生徒に募集しました(平成27年9月)。創立120周年記念事業実行委員会によっていくつかに絞り、最終選考を在校生による投票で行い、以下の作品に決定しました。

記念標語

受けつがれる伝統 創り出す未来

シンボルマーク



記念式典パンフレット



記念A4クリアファイル





畝高賛歌の作曲は、本校卒業生の小林瑞季さん(64期生。桐朋学園大学音楽部音楽学科作曲専攻卒業)に依頼しました。

記念賛歌

畝高賛歌

作詞 木下 諒亮・金 エリム  
作曲 小林 瑞季

1 大和の景色に広がる大地  
光をあびて 輝く校舎  
夢を語り合いながら  
友と並び歩いてゆく  
畝傍の歴史はまだ見ぬ先へ  
我らをはこんでく 希望を込めて

2 世界の果てまで広がる大地  
国境越えて つながる心  
肌で感じる未知なる空気  
新たな自分を見つけ出す  
畝傍の未来はまだ見ぬ先へ  
我らは進んでく 思いをのせて

畝高賛歌

作詞：木下諒亮  
：金エリム  
作曲：小林瑞季

Andantino mp

1 大和の景色に広がる大地  
光をあびて 輝く校舎  
夢を語り合いながら  
友と並び歩いてゆく  
畝傍の歴史はまだ見ぬ先へ  
我らをはこんでく 希望を込めて

2 世界の果てまで広がる大地  
国境越えて つながる心  
肌で感じる未知なる空気  
新たな自分を見つけ出す  
畝傍の未来はまだ見ぬ先へ  
我らは進んでく 思いをのせて





◆学校長式辞  
浅田 重義

◆来賓祝辞

奈良県教育委員会教育長 吉田 育弘様  
 橿原市長 森下 豊様  
 奈良県立畝傍高等学校同窓会金鶏会会長  
 堀井 良殷様

◆生徒代表挨拶

生徒会長 吉村 涼花 (2年7組)

◆表彰者

標語の部 松浦 暢利 (2年10組)  
 シンボルマークの部  
 吉村夏奈子 (3年1組)  
 賛歌の部 木下 諒亮 (3年9組)  
 金 エリム (3年7組)  
 小林 瑞季 (64期生)

◆生徒司会

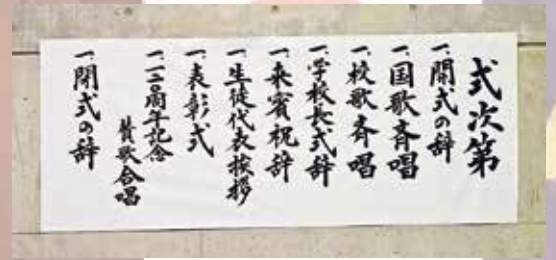
平山 貴之 (2年10組)  
 吉野 純也 (2年7組)

◆国歌・校歌斉唱

ピアノ伴奏：藤井本加恵

◆畝高賛歌

指揮：藤井本加恵  
 ピアノ伴奏：梅本美穂子 (2年3組)  
 合唱：1・2年の音楽選択者





教育長  
吉田 育弘様



榎原市長  
森下 豊様



金鷄会会長  
堀井 良殷様



生徒会長  
吉村 涼花



表彰式





2016年10月27日 記念講演



演題

# 「私の外交官人生」概要

前国際連合日本政府代表部  
特命全権大使・常駐代表

よしかわ  
吉川

もとひで  
元偉

氏

本日の講演では、私の畝傍高校での経験や、42年にわたる外交官の仕事についてお話ししたい。

どういうきっかけで外交官を目指すようになったのか、その過程で自分なりに学んだことを紹介して、現在非常に難しくなっている国際社会の中で、畝高の皆さんにどのような人物に育ってほしいか、について自分の希望を述べたい。

## 1. 畝高との関わり、アメリカへの留学

私は御所で生まれた。1966年に自宅から近い畝傍高校に入学し、中学の頃から英語に興味があったので、ESS部に入部した。部長は1年上級の末吉 高明さんという御所の人だった。末吉さんは、すでにアメリカへ留学するための勉強をしていた。我々2人は毎朝30分の通学電車の中で「松本 亨NHKラジオ講座」の番組を声に出しながら復習した。番組のテキストを暗記し、電車の中で役割を変えながら、何度も声を出してしゃべるのだ。その秋、末吉さんはAFS奨学金の試験に合格し、翌年の夏から1年間、アメリカへ留学した。末吉さんは、現在香川県にある四国学院大学学長を務めておられる。

翌年の選考で、私もAFS留学が決まった。当時私は外国人と英語で話した経験は殆どなかったが、実際にアメリカへ行くと、英語を聞き取ることはさほど難しくはなかった。毎朝電車の中で末吉さんとラジオ講座を復習していたことが役に立った。

アメリカでは毎日何が起きるんだろうと思ながら学校に行った。1年間楽しくて仕方がなかった。この1年間で、自分に対する自信がついた気がする。また、将来のことを考える良いきっかけにもなった。留学中、将来は何になりたいのかとよく聞かれた。自分自身何をしたいのかと真剣に考えたこともなかったが、外交官かジャーナリストになりたいと答えていた。しかし、それまで外交官にもジャーナリストにも会ったことはなかった。漠然と、日本と外国とをつなぐ仕事に就きたいと考えていた。

アメリカでの留学の後、畝傍高校に復学し、末吉さんの後を追う形で国際基督教大学(ICU)に進学した。その頃には、外交官になろうと決めていた。大学では、外交官試験に合格するため、猛勉強した。あんなに勉強をしたのは生まれて初めてだった。この試験勉強は自分にとっては全く苦にならなかった。何時間勉強しても疲れることはなかった。幸運にも試験に合格し、ICU卒業後外務省に入った。

## 2. 外交官としての日々

42年間の外交官の生活は、自分にとっては楽しいものだった。外務省では上司に恵まれ、重要な仕事をさせてもらった。やりたかった国連関係の仕事も、合計10年間で、最後は国連大使を務めた。

多くの任地で仕事をする間には、辛いことや苦しいこともあったが、一番大変だったのは中東アフリカ局長の時期だ。当時は小泉政権で、イラクとアフガニスタンでは戦争が続き、日本から自衛隊がイラクに派遣されていた。イラクでは、日本人の人質事件も頻発していた。無事解放された例と殺害された例があったが、これらの経験を通じて、最終的にはどんなことでも、自分の力で変えられることと、自分の力では変えられないことがあることが分かった。実際に人質事件が起きた時、自分の力ではできることはごく限られている。いかにして次の人質事件が起きないようにするかが、大切だ。人質事件のように難しく、かつ、いつ終わるのか分からないような時には、精神的、肉体的状況を万全なものにして、緊急事件が起きた時にきちんと対応できるように備えておくことが大事である。

## 3. 自分の経験から言えること

- ①もしも畝高に進学しなかったら、末吉さんとは出会えなかった。この立派な先輩との出会いが、その後の自分の人生の方向を決めた。
- ②アメリカでの1年間では多くのことを学んだ。将来は外交官になりたいという確固とした考えが、この時にできた。
- ③外交官という仕事に就いて、色々なことをやってきたが、42年間、毎日が楽しかった。辛いことがなかった訳ではないが、現場から逃げたいと思ったことはなく、むしろ問題をどう解決していくかを考えるのが仕事だったので、自分の職業選択について満足に思っている。



- ④外務省のみならず中央官庁で、仮に組織の幹部全員が東京出身、同じ大学出身であると、必ずしも総合力が大きくならないのではないだろうか。地方出身者、色々違った体験をした人たちが同じ職場にいることは、組織にとって強みである。自分の経験から、地方出身者であるということは、決してマイナスではないと確信する。皆さんもぜひ、どの大学に行きたいかではなく、自分は何をやりたいのかを考えていただきたい。

#### 4. 2つのエピソード

私の言いたいことに関係する2つのエピソードを紹介したい。

日比谷公園など日本の主要な公園を設計した本多 静六という造園家がいる。明治から昭和の人だ。その語録から。「人生で成功するコツは、職業を道楽にすることだ。」どういう仕事であれ、それを天職にし、日々の務めが愉快でたまらない状況にしていく。それはあなたの人生が成功しているということだ、と本多先生は言った。大事な指摘だ。皆さんは、勉強が愉快でたまらないという気持ちに毎日なっているだろうか。どうやったら本多 静六のようにになれるのか難しいが、モチベーションを上げることが重要だと言える。

もう1つエピソードを紹介する。プロ野球の近鉄の選手であった野茂 英雄について。野茂は大阪の人で、実業団から近鉄へドラフト1位で入団、その後メジャーに入り、新人王になった。最もすぐれた投手の一人だ。その彼がアメリカから一時帰国した時のインタビューでこういうことを言った。「自分は子どもの頃から、投げるのも打つのもよくできたので、高校、実業団、近鉄と進み、記録を残した。ただ自分は、正直に言うと、日本では野球場へ行くのはしんどかった。ところがドジャーズへ行ったら、毎日球場へ行くのが楽しくて仕方がない。日本であれほど辛かった野球が、今は楽しくてしょうがない。」野茂は日本から追われるようにしてアメリカに行ったが、彼が成功したおかげで、その後日本のプロ野球からメジャーリーグに行く選手が増えた。

#### 5. まとめ

これからの世界、日本を取り巻く現状は、どんどん難しくなっていくと思う。たとえば今大きな話題になっているアメリカの大統領選挙戦からも、アメリカ国民に存在する内向きの考え方、世界の色々な問題に関わりたくないという気持ちと、アメリカの世界における総体的な力の低下があると感じる。日本国内を見ても高齢化と人口減少の問題が起き、労働力が落ちている。そういう中でどうすれば日本の経済力を維持していけるかは、これまで以上に難しいし、日本の活力を維持するため、皆さんの世代はとても重要な役割を担うことになる。

畝高の卒業生として、在校生の皆さんに是非こうなってほしいと思うことを、最後に申し上げたい。畝高はスーパーグローバルハイスクールの指定を受けているが、日本ではどうやったら国際人を作れるかとか、グローバルな人材をいかに作るのかということについて、余りにも気軽に議論していると感じる。私は「国際人」という人は存在しないと思っている。まず、日本人として立派な人間になること。これができなくて、グローバル化も国際化もないと思う。では立派な日本人とはどういう人か。歴史、文学、といった教養、そして年長者への礼儀、正しい言葉遣いを身につけていることなどが挙げられる。立派な日本人であれば、立派な国際人や立派なグローバルな人材になることは、それほど難しくはないと思う。

同時に皆さんにお願いしたいのは、学生時代が終わって社会人になっても好奇心をなくさないでいて欲しい。いつも新しいことに挑戦する心の余裕を持っていただきたいと思う。それから皆さんが、将来どのような仕事についても英語は必須である。皆さんが英語でしゃべる相手は、英語を母国語とする人ではない可能性が大変高いだろう。アクセントが違って、なまりがあって、言っていることが分からないこともあるだろう。英語を「語学」ととらえるのではなく、意思疎通の「道具」ととらえて、しゃべれるようになって欲しい、スキーができるとか、ギターが弾けるとか、そういう風に考えて英語を学んでいてほしい。

最後に、畝高にいる間に、自分は人生で何がしたいんだということを、何度も自分自身に問いかけてほしい。どの大学に行きたいかを問いかけるのではなく、何をしたいのかだ。何をしたいのかが分かると、そのためにどういう勉強をすればよいか、分かってくるものだ。ぜひ、立派な日本人になって、日本、そして世界で仕事ができる人材になっていただきたい。





卒業生の小川 響子さん（ヴァイオリニスト）による記念演奏



小川 響子（おがわ きょうこ）

奈良県立畝傍高等学校卒業。奈良県橿原市出身。  
5歳よりヴァイオリンをはじめ。第60回全日本学生音楽コンクール 大阪大会第1位、全国大会第2位。  
第10回東京音楽コンクール 弦楽部門第1位、及び聴衆賞を受賞。  
ザルツブルク=モーツァルト国際室内楽コンクール2015第1位。  
これまでに新日本フィル、日本フィル、都響、神戸市室内合奏団、関西フィル、藝大フィル他オーケストラと共演。サイトウ・キネン・オーケストラに参加。また、文化庁派遣事業にて保育園や学校でのアウトリーチ活動も行っている。  
東京藝術大学卒業。現在、同大学院音楽研究科修士課程に在学中。



ピアニスト

山中 惇史（やまなか あつし）

東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業後、同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了。  
在学中より漆原 啓子、漆原 朝子、清水 高師、ピエール・アモイヤル各氏をはじめとする国内外の著名な演奏家との共演、又は委嘱を受けるなど、ピアニスト・作曲家として幅広く活動する。アレンジャーとしても様々なアーティストを手掛けている。  
NHK-FM「リサイタル・ノヴァ」BS-TBS「日本名曲アルバム」などに出演。  
現在、東京藝術大学音楽学部ピアノ科に在学中、江口 玲氏に師事。

<曲目>

サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン  
ベートーベン：ヴァイオリンソナタ 第5番「春」より第一楽章  
葉加瀬 太郎：エトピリカ ほか



10年間をふりかえって





## 生徒とともに

平成19年度 第3学年主任 片岡 衛

その3年前、共に敵高の校門を潜った生徒達に、平成19年度は学年主任として関わらせていただきました。3年間の教育活動の中で、多くの先生方のご指導と保護者の皆様方のご理解ご協力により、あどけなさの残る生徒達が逞しい青年に成長する過程を、共に目の当たりにすることができました。

一学年次は5年ぶりの担任として、慣れない高校生活に戸惑う生徒に寄り添い、時には家庭訪問にもかなりの時間を割いて、自立に向かっての基盤作りに取り組みました。当たり前のことですが、入学即高校生ではなく、高校生活を通して高校生となることの意味を改めて実感した1年でした。次年度より主任として学年を預かり、北海道への修学旅行の取組の他、この年着任された谷垣 暁弘校長先生のご指示の下、特に学年係の先生方と共に学力向上に向けた教科別研修の実施、放課後の各種講座内容の再検討等に力を注ぎました。また、部活動との両立に腐心する生徒の現状に鑑み、適正な宿題や課題量について教科間で議論を重ねました。「例年通り」ではなく、「目の前の生徒にとってどうなのか」という視点を教員同士が互いに共有した1年でした。文武両道を体現する生徒達のがんばりには目を見張るものがありますが、特にこの年、本校野球部が第80回センバツ高校野球大会の21世紀枠近畿代表に選ばれたことで、敵高生の志気が大いに高まりました。部活動や学校行事で充填したエネルギーを勉学で活用する姿勢は、3学年次においても発揮され、秋からの学力伸長の原動力になりました。もちろん、先生方の精力的な教科指導と緻密な進路指導があればこそなした成果です。

高校生という思春期の若者の育成に「学年」というチームで関わることができたことは、望外の幸せです。彼らも今では、その若さ溢れる力で社会の一翼を担い始めているものと思います。教育という仕事の意義を、今深く噛みしめています。

創立120年というこの年を新たなスタート地点と捉え、母校敵傍高等学校が更に力強くしなやかに発展されますことを祈念いたします。

2007



## 敵傍高校での思い出

第60回(平成19年度卒業) 北森 大基

先日、高校時代のクラスメイトと酒を交える機会がありました。当時の思い出話に花が咲きつつも、会話の終着点は「もう9年前か…」の一言。そうなのです。我々が敵傍高校を卒業してからはや9年が経ちます。9年間といいますと百獣の王ライオンでさえ、その一生を静かに終えんとする年月でございます。しかし、9年という月日があっという間に過ぎ去ったのは事実としても、当時の思い出は次から次へと自然に溢れ出てまいります。これも、敵傍高校という温もりで溢れる学び舎で過ごすことができたこと、ならびに素敵な先生方や友人と出会えたことによるものだと、改めて実感しておる次第です。

さて、当時の学生生活で思い出されますのは、やはり勉学に打ち込んだ毎日でしょうか。校門を抜けると出迎えてくれるのはそよそよと戦ぐ木々と歴史の重みを感じさせる校舎。ギシギシと音を立てる廊下をわたり「いつ穴が開くのだろう。」という不安を感じながら教室へ向かいます。毎日の授業、先生方の情熱に引っ張られ大多数の生徒が熱心に取り組む一方で、その張りのある声を子守歌に、教科書を枕に夢を見る私(と一部の友人)。しかし夏場はやかましいセミの鳴き声とあまりの厳しい暑さに多くの生徒が授業に取り組むこともままなりません。しかも驚くべきことに当時の我が校はたった2台の扇風機でその暑さに抗おうとしておりました。なんと無謀な抵抗と言えましょうか。わら半紙のプリントが、幾度となく吹き飛ばされたことも鮮明に思い出されます。現在の校舎には、なんと空調設備が整えられたと伺いました。これまで以上に快適な授業、そして快適な睡眠が約束されたことかと思えます。

それ以上に私の学年では部活動への取り組みも盛んであったと思います。運動部・文化部ともに多くの生徒が活動に取り組んでおりました。授業時間には死んだ魚のような目をしていた私(と一部の友人)も、放課後には水を得た魚のような目になっていました。学校中が本当に活気に溢れ、日が暮れるまで朗らかな笑顔が至る所で見受けられたものです。ただ、あまりにも部活に熱を入れすぎがあまり、成績が芳しくない生徒もおりました。成績不良者に対して考査後に行われる補習「集い」では毎度毎度同じ面々。「今回、集う？」を合言葉とし、「集い」を通じて育まれる友情も多々ありました。

敵傍高校の校風には、生徒の主体性を重んじていただけるということがあると思います。それは数多くの行事にも色濃く反映されておりました。

敵高祭。各クラスしのぎを削ってのダンス発表。慣れない踊りに苦労しながらも、夏休みを使っての練習は、このうえなく楽しいものでした。しかしあまりに受験勉強をしないために練習禁止期間が設定される前代未聞の展開となったのも、良き思い出です。

体育祭。橿原競技場を借り切ったの催しは、意欲も自然と溢れ、自身の体力の限界に挑戦しました。現在は校舎の老朽化にも負けない勢いで、身体の衰えを実感している毎日です。

大きな行事も小さな日常も全ての出来事が我々の財産であり、現在でも社会で生き抜くための大きなエネルギーとなっていることは間違いのないと言えます。今回の寄稿にあたっては、個人的な思い出が中心となりましたが、この記念事業を通じて多くの皆様が当時は懐かしむ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、敵傍高校、創校120周年おめでとうございます。120年にわたり多くの素晴らしい人材を育成・輩出され続けております貴校に、僅かながらも関わりを持たせていただけますことに、深く感謝申し上げますとともに、栄えある今日の日を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。今後益々のご発展を祈念いたします。





10年間をふりかえって

120th Anniversary

2008





## 畝傍高等学校での思い出

第61回(平成20年度卒業) 畠林 慎士

日々の職務に忙殺されていくなかでも、子どもたちの笑顔や満足した表情、悔しさがにじむ涙を見るたび、この仕事を指し、そして選んで良かったと感じる。毎年、そのような場面に何度も立ち会ってきた。中学校の教師として現任校に赴任して4年、常にワクワクさせてくれる子どもたちとの触れ合いは日々新鮮なものである。

「先生という仕事を指すなら、様々な考えを持つたくさんの人と接しなさい。」

高校3年生、進路選択が迫ってきていた初秋の頃、当時の担任の先生にいただいた言葉である。教育系大学への進学か、総合大学への進学かを迷っていた私の背中を押してくれた大切な言葉である。その言葉を受けて総合大学へと進学した私は、様々な価値観や境遇、夢や生き方を持つ仲間と出会うこととなった。

さて、担任の先生の言葉に後押しされた私の受験前の居場所は進路室であった。塾にも通っていなかった私にとって、同じように目標に向かう仲間とともに学ぶ場としては貴重であった。いつも満席に近い室内では、静寂の中に黒鉛の擦れる音だけが響く。とても素敵な空間である。しかし、進路が決定していくと一人、また一人と進路室に集う者は減っていった。私は卒業式を終えた後も一人、進路室に通った。前期試験を終えた日の夜、不安に駆られて試験会場から学校へと向かうと、暗い校舎の一角、進路室に優しく灯りがともされていた。扉を開けた私に気付いた先生方が、包み込むような笑顔で出迎えてくれたこと、座り込んだ私にあたたたかいお茶をくれたことを今でも覚えている。

畝傍高校は私にとって、かけがえのない場所となっている。思えば、畝傍高校で過ごした3年間も、多くの人との出会いの日々であった。勉学に励む仲間とともに肩を並べて遅くまで勉強したことや、部活動に全精力を傾ける者と朝早くから練習に励んだこと。教科に愛を注いでいたり、いつでも私たちを支えていただいたりした恩師の方々との出会い。文化祭では学年みんなで肩を組み、大きな円陣をつくったことも懐かしい。今、筆を進めていてあらためて実感する。仲間とともに笑ったことや全力で取り組んだこと、流した涙の分だけ悔しさや感動があったこと。そして、そのすべてが今の自分の一部となっているのだと。

「先生という仕事を指すなら、様々な考えを持つたくさんの人と接しなさい。」

先生という仕事に就いた今、担任の先生からいただいたその言葉の意味を改めて感じている。これから先、私が出会う次の世代の子どもたちにも伝えていきたい。畝傍高校での日々を回顧しながら、そのように決意して筆をおく。

平成20年度 第3学年主任 吉田 正幸

畝傍高校創立120周年おめでとうございます。8年間の在職でしたが、多くの生徒・保護者・先生方の協力のおかげで勤めることができたことに感謝いたします。転動して驚かされたこと・感心させられたことを数点あげたいと思います。

- ・立派で素晴らしい文化創造館
- ・本館教室の歴史を感じさせる佇まい
- ・畝高祭フィナーレでの生徒たちのエネルギーの爆発
- ・勉学以外でも多彩な素晴らしい才能を持っている生徒たち

私は、平成18年4月の入学生を卒業まで3年間、学年主任として担当させていただきました。入学式の挨拶で、サラリーマン川柳「大船に乗ったつもりが難破船」の話をしました。これからの時代、何が起こるかわかりません。あらゆる変化に対応でき、自ら考えて行動できる力を付けてほしいという思いを託しました。普通科の特色選抜入試の初年度の学年でした。学校独自の検査問題に挑み、頑張れた生徒たちの思い・姿勢は学年に少しずつ広がったように感じました。

総合学習SFU「学びへのアプローチ」では、身近な関心のあるテーマで小論文を作成し、各クラスの代表者が発表をしました。パワーポイント・紙芝居など創意工夫を凝らし、感心させられる内容がたくさんあり、生徒たちの持っている能力の一端を見た気がしました。球技大会では数日前から早朝練習に励み、体育大会ではクラスの旗を作製し応援する等々。何事にも全力で取り組んでいく姿には感心させられ、本来持っている高校生の真の姿を見たように思いました。

生徒たちの持っている素晴らしい能力を生かすきっかけを掴んでもらうために、私は3年間機会あるごとに「しっかり自分を磨きなさい。」と言い続けました。

生徒たちの成長と共に、私も多くの事を学び、教えてもらった3年間でした。

数年前に学年同窓会が開催されました。卒業して4年が経過していましたが高校時代とは違い、成長した考え方・行動がとれていることに嬉しく思いました。

畝傍高校3年間で学び、身に付けた多くの事を礎に、社会人として活躍してくれることを願っています。

最後になりましたが、畝傍高校の今後益々の発展を祈念いたします。



# 2009

でした。私は何とくじ引きで負けてしまい、私のクラスは「旭山動物園コース」になりました。翌朝のSHRでの行き先報告は、大変ばつが悪い思いでした。でも、実際行ってみるととても素敵なコースでした。とても綺麗な札幌の夜景が見られましたし、おいしい海鮮料理にも舌鼓をうつことができました。また、ラフティングでは、スエットスーツを着て、川に飛び込んだり、水を掛け合ったりと、童心にかえって楽しむことができました。場所は違えども、他のコースでも、同様であったと聞きました。

3年生の時には、全国高校総合体育大会が奈良県を中心に開催されました。体育系の多くの生徒がこの大会を目指し、頑張りました。結果、敵高からは男子弓道部と陸上競技部が参加し、陸上競技部の吉村 健吾君は、男子400mで7位入賞を果たしました。

でも、敵高生にとって、最大の関心事は勉強にあったのではないかと思います。今では教室にエアコンが当たり前ですが、あの当時は扇風機を全開にして、汗を流しながらの夏期講習でした。「集い」というものも忘れられない言葉です。3年生になると、招待状も届かなくなり、受験勉強にも熱が入るようになりました。日増しに顔つきが厳しくなる皆さんに、「現役生は、受験日の朝まで成績が伸びる」と激励したりもしていました。

一緒に笑ったり、泣いたり、励ましたり、叱ったり。皆、同じ釜の飯を食べた仲間だという思いが湧いてきます。この絆を大切にしたいものです。

思いつくまま思い出を綴ってみました。これらの敵傍高校のますますのご発展と卒業生の皆さんの活躍を祈念し、120周年に寄せる小記とします。



## 輝かしい畝高生活

第62回(平成21年度卒業) 吉川 千晶

畝傍高校がこの度、120周年を迎えるにあたり、記念誌への寄稿という大役を賜りました。まずはお祝いとともに、このような機会を与えていただきましたことに、お礼を申し上げます。私の在学中、畝傍高校で過ごした時間がどれほど素晴らしいものであったか、拙い文章ではありますが、少しでも皆様にお伝えできればと思います。

高校2年生の時、私は生徒会活動が楽しくて仕方ありませんでした。特に印象深いのは畝高祭です。準備期間中、毎晩遅くまで当時の生徒会メンバーと議論を交わし、何度も試行錯誤を繰り返しました。企画、運営、照明に至るまで、何もないところから、一つのことを仲間とともに作り上げる楽しさ、うまくいかないもどかしさ、認められない悔しさ、無事に畝高祭を終えることができた後の安堵と、達成感や喜び。細かい出来事はもう覚えてはいませんが、当時胸に過ぎた様々な感情は、今でも色褪せることなく私の心の中で息づいています。

畝傍高校で私が出会ったのは、気の置けない仲間ばかりではありません。先生方はみな、あまり勉強の得意でなかった私にどこまでも優しく、根気強く、丁寧にご指導くださいました。ある先生に、どうもこの教科が苦手だと打ち明けると、先生は毎日のように朝と放課後に時間を作り、研究室で勉強を教えてくださいました。3年時の担任の先生は、模試でいい結果が出せずとも、決してあきらめるとは言わず、いつも励まし、私の背中を押してくださいました。3年生のクラス担任を受け持つのが初めてだと仰りながら、熱心に私の志望校について調べ、資料を取り寄せ、模擬面接を行ってくださいました。センター試験の前には、クラス全員を激励し、お腹が空くだろうからとお菓子を配ってくださいました。学級最後のホームルームで、先生が泣きながらこのクラスの担任ができてよかったと仰ってくださいましたことも忘れられない思い出です。

卒業式のサプライズ演出で、卒業生全員でキロ口の『未来へ』を歌い、それぞれの未来へ向かって畝傍高校を飛び立つてから、もう7年になるうとしています。その間には多くの出会いや別れ、様々な出来事がありました。しかし、畝傍高校での経験や仲間との絆が今の私の礎となり、私の人生を豊かにしてくれたことは間違いありません。

私の在学期間は、畝傍高校の歴史のほんの1ページでしかありませんが、私にとっては同級生との何気ない日常の思い出すら眩しく、何よりも素晴らしい日々でした。歴史ある畝傍高校の卒業生であることに誇りを持ちつつ、恩師や友、そしてあの頃輝いていた自分に恥じないような人間になれるよう、これからも日々精進していきたいと思っています。

平成21年度 第3学年主任

江藤 芳彰

平成19年4月1日、畝傍高校に着任した私は、宝形造の瓦屋根の頂に九輪を頂く帝冠様式の威風堂々とした校舎に圧倒されるとともに、畝高生との出会いに心を躍らせていました。私は1年8組の担任を拝命しました。入学式後のHRでは、畝高での卒業を春に例え、「春には大きな君が花になれ!」と大きく黒板に書き、生徒を迎え入れました。この学年の学年主任は化学の円先生で、3年間、個性派ぞろいのこの学年を陰になりひなたになり引っ張っていたただくことになりお世話をおかけしました。

畝高の文化行事は本格的でした。特に、1年生の音楽鑑賞会では、その演出に度肝を抜かれました。ただでさえ立派な文化創造館のホールの真ん中に、キュービク状のステージが設けられ、皆でそのステージを取り囲みました。そこで、アカペラグループ「宝船」「Paranathion」がカラフルなステージを見せてくれました。3年生での、宋次郎さんのオカリナ演奏も記憶に残っています。個人的には、12月の文化部発表会で、吹奏楽部とコラボし、モーニング娘の「ハッピーサマーウェディング」を歌って、踊ったことを懐かしく思い出します。

3年間で最大の学校行事といえば、北海道修学旅行でしょう。私は勝手に、提示されていたコースに、「函館山夜景コース」「ゆったり札幌・小樽コース」「旭山動物園コース」と命名し、生徒にPowerPointで作ってコース紹介をしました。各コースを巡るクラス数には制限があったので、希望多数のコースは担任がくじを引かなければなりません。担任にとっては、相当のプレッシャー



第63回(平成22年度卒業) 出口 輝樹

私は部活動として陸上競技部で練習に励みながら、生徒会にも所属していました。様々な学校行事を振り返ると、当時の私たちの学年は気の良い人が多く、団結力がある学年だったように思います。

3年生は毎日の生活が受験勉強一色に染まり、日を追う毎にクラスには緊張感が高まってきました。楽しいことと言えば、お昼休みの談笑や学校行事くらいのものでした。私は生徒会長を務めていたこともあり、そういった学校行事となればお祭りの血が騒ぎました。『放て！HOTな愛のウネビーム』と題して高校生活最後の畝高祭が行われ、クラスの模擬店や部活動の発表がありました。私も生徒会OBとして後輩役員をサポートしていました。最終日のエンディングが終わったとき3年生によって、文化創造館に自然と大きな円陣ができました。全員で肩を組んで一つになり、最後の瞬間までこの学年であることを噛み締めるかのように畝高祭を締めくくったことは今でも鮮明に覚えています。

3月1日に迎えた卒業式。この日は自分にとって一番思い出に残る日です。私はお世話になった人や大好きな友達に感謝の気持ちを伝えようと答辞をつくりました。一文字、一文字、噛み締めるように、高校3年間の思い出しながら読み上げました。『今、一つ言えることは、私はこの畝傍高校が、この学年が、皆さん一人一人のことが大好きです。』これは答辞の中の一文で、一番伝えたかった言葉です。止まらない程に涙を流しながら、自分は本当に高校生活が大切なものだったのだと感じました。後日談ですが、当時の校長先生はあまりにも涙が止まらないようなので、ハンカチを貸して慰めようかと思ったと話してくださったほどでした。最後のホームルームを終え、卒業生は体育館に集まりました。そこで、最後の畝高祭と同じように全員が肩を組み、大きな一つの円をつくって畝高祭のカラオケで歌った曲をもう一度歌いました。きっと皆がこうして集まるのも最後だと思いながら過ごした時間でした。

卒業から5年が経ち、私たちの学年の多くは社会人として歩み始めたところです。節目には同窓会が開催され、昔から変わらない人柄の中にも確かに大人になった姿を見ることができます。高校時代の3年間は短い期間ですがその時間はとても濃密で、一生付き合っていきたいと思える仲間と出会えたことが一番の財産ではないかと思っています。





## 第63回卒業生の思い出

平成22年度 3年6組担任 駒沢 肇

「畝傍の山の 緑濃く …」と校歌にも歌われる大和三山を臨む建国神話の地、橿原に創立された奈良県立畝傍高等学校が120周年という節目の年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。また、この機会に思い出の一端を寄稿させていただくことができますことに感謝申し上げます。

63期生は、平成20年4月より3年間関わりを持たせていただいた学年です。そして、畝傍高校の最終学年としての一年間を担任として、ともに過ごさせていただきました。

今、63期生の3年間を振り返ってみますと、数多くの取組を進めてくれたことを思い出します。総合的な学習の時間の総括として実施した小論文発表会。悪天候にも関わらず県内7校の生徒たちとともに見事に演じきった「近畿まほろば総体」総合開会式公開演技。臨時休校や定期考査の日程変更を余儀なくされた新型インフルエンザの流行。時期を5月に移動させて開催した新入生歓迎体育大会。そして、ラフティングなどのアクティビティと大自然を満喫した修学旅行。蝉の大合唱とともに汗を拭いながら受講した夏期講習。そのどれもが、「畝高生」としての自覚と責任を持った取組であり、貴重な体験として思い出になっていることと思っています。また、校内外を問わずに取り組みされたボランティア活動をはじめとして、生徒会活動がより活性化されたことも63期生の取組の特徴の一つに挙げられるのではないのでしょうか。卒業後ではありましたが、東日本大震災に対する支援のための街頭募金をいち早く実行に移してくれました。

また、「3年6組」の一年間の思い出は、食材を工夫してバーベキューを楽しみ、水鉄砲で童心に戻ってはしゃいでいた舞洲での校外学習、そして、9月の畝高祭です。食材の調達、模擬店の装飾、クラスTシャツの作成、なぜか「カールおじさん」が大量に現れた畝高の一日、クラスCMの舞台発表など、一人ひとりが一生懸命自分の役割に取り組み、その一瞬一瞬に輝いていたように思い出されます。そして、「3年6組」という一つのチームを見事に作り上げてくれました。

63期生とともに過ごした日々は、私にとっても教員として、今も活かし続けることができる貴重な体験の数々を得られた3年間であり、彼ら彼女たちと出会え、同じ時間を共有できたこと本当に感謝しています。

校訓「至誠・至善・堅忍・力行」のもと、120年の伝統に新たな夢を紡ぎ、さらなる進化を遂げられますことを、心よりお祈り申し上げます。





# 2011

えます。これからの畝傍高校もいつまでも楽しく、何事にも励みチャレンジできる勇気のある畝高生が育ってほしいと思います。畝傍高校がさらに存続していきますますのご発展をお祈りいたします。

(工藤 彰優)

私には、忘れられない景色がある。

畝高祭が終わり、私は生徒会役員として、屋上で、モノメントの片付けを行っていた。グラウンドではもうすでに、部活動の練習に明け暮れる生徒の姿が見える。隣には、この数ヶ月、一緒に頑張ってきた生徒会の仲間たちがいる。そんな中で見た、綺麗な夕日が、私は忘れられないのだ。一つの行事をやり遂げた達成感と、非日常が終わっていくことに対して感じる一抹の寂しさが、あの日の夕日をより一層、綺麗にさせていたのかもしれない。

私は生徒会長になった初めの頃、みんなを引っ張っていかねばならないと、肩肘を張りすぎていた。そんな私を見かねて、生徒会のメンバーの一人が、「ちょっと一人で抱え込みすぎちゃう？私らにも相談してや。」と声をかけてくれたのだ。そこで初めて、自分一人だけが頑張ってるんじゃないという当たり前のことに気付いた。それから、自分の思っていることをメンバーに相談し、メンバーの思っていることもしっかりと聞き出すように心がけた。そして、生徒会だけでなく、できるだけ多くの生徒の意見を聞いて、どんな畝高祭にすれば良いか考え、行動するようになった。

このような貴重な経験ができたのは、何ごとにも一所懸命で、一緒に頑張ってくれる畝高生がそばにいてくれたおかげだ。そんな素晴らしい仲間、一人ひとりと過ごした時間が、今の私にとってかけがえのない宝物である。

(長倉 寛明)



畝傍高等学校の皆様、こんにちは。

私たちは畝傍高等学校の皆様と交流をしている全州撞映女子高等学校の生徒会長と副会長です。東北関東大震災から4週間あまり過ぎましたが被害の甚大に心が痛みます。この度の東北関東大震災で多大な被害に遭われた日本の皆様に再びお見舞い申し上げます。

被災された方々の悲しみ、絶望感、被害の大きさをテレビで拝見し、胸が痛み、悲しく辛くなりました。それで校長をはじめ全教職員と私たち全州撞映女子高等学校の全校生が募金をしました。被害に遭われた方々に少しでも役に立つことができればと思います。心を込めた私たちの気持が少しでもそちらに届いてほしいです。

被災地の皆様が一日も早く復興し笑顔になりますよう毎日心より祈っています。

これからも頑張って前を向いて歩いていきましょう。

日本ガンバレ！ 畝傍高等学校ファイト！

平成26年度から本校はスーパーグローバルハイスクールに指定され、それ以後はマレーシアや台湾、オーストラリアの高校生が本校を訪れて交流を行ったり、本校生のシンガポール・マレーシアへの海外研修やオーストラリアへの海外フィールドワークなど海外の生徒との交流が多くなりましたが、そのような活動はそこから始まったわけではなく、それ以前から育まれていて、それはまさしく本校の紹介パンフレットに書かれている「進化する伝統」そのものなのだと感じております。130周年そしてさらに未来に向けて、本校の伝統がますます進化していくことを祈念いたします。



## 第64回 (平成23年度卒業生)

工藤 彰優  
長倉 寛明

畝傍高校創立120周年にあたり、先輩方が築き上げた伝統と文化のある学び舎で勉強ができたことに改めて誇りを感じます。また、私が卒業をした後に後輩達が伝統を引き継ぎ、今日まで畝傍高校が変わらず存続してくれたことに喜びを感じております。

さて、私の畝傍高校3年生の経験は忘れられないほど楽しい時間でした。私は野球部に所属していましたが、第93回全国高校野球選手権奈良大会ではベスト4の成績を残しました。翌年は準決勝で智辯学園高校に勝ち、準優勝するので忘れられているかもしれませんがその前年の年に当たるのが我々の学年です。あのとき、野球部が県予選で勝ち上がった理由は野球部の選手の高かったからではないと考えます。在学生の方や、卒業生の方々の応援があつてこそ残せた結果です。私がグラウンドでランナーコーチをしていたときに声援の迫力で背中が押されるような感覚は、あとにも先にもない経験です。あの声援を感じた時に畝傍高校の一致団結のパワーを感じたと同時に、畝傍高校への愛のようなものも感じました。

応援によって高校生はそれ以上の力を発揮することもあるので、野球部にかかわらず、いろんな部活動に応援をしていきたいと思えます。

また、我々の学年の思い出としては学校行事になるとそのパワーを勉強に生かせばどれだけ進学率が上がったかと思うほど盛大に盛り上がりました。体育大会でも畝高祭でもみんなが集まればなんでも楽しくなるようなそんな雰囲気がありました。特に印象深いのは卒業式でした。みんなで体育館に集まり、一つの円を作ったときにこの学年で本当によかったなと感じました。卒業してからも学年で集まって、球技大会を催したときも多く集まりました。同窓会でも200人を超えるほど学年の仲間が集まるので、卒業しても結びつきの強い学年だと感じています。

私たちの畝傍高校の生活は本当に楽しいものでした。ほかの学年の方々も楽しかったのではないかと感じます。それは畝傍高校の伝統ではないかと私自身考



### 第64回卒業生が在籍した頃 〜東日本大震災と畝高

平成23年度 第3学年主任

上野 仁

奈良県立畝傍高等学校の創立120周年、誠におめでとうございます。

私自身は64期生が2年生の時の平成22年度に本校に赴任しました。その時は2年3組の担任として、いきなり6月の北海道への修学旅行の準備に忙しかったことを思い出します。また、この年度の終わりには韓国の全州権映(チヨンジュクニョン)女子高等学校による学校訪問もあり、現在のSGHの取組で行われている台湾やマレーシア、オーストラリアなどの高校生との交流の走りやすで行われていました。この時の交流では当時の生徒会の生徒(65期生)が中心となり、64期生も希望者が集まって文化創造館で交流事業を実施しました。

その平成22年度末の3月11日、午前中に避難訓練が行われました。火事を想定した訓練でしたが、避難でグラウンドに集まった生徒達を前に当時の池永教頭先生が「今回は火事を想定しましたが、地震が起こった時の避難についても普段から考えておいてください」と講評をされました。そしてまさにその日の午後、東日本大震災が起こったのです。

震災を受けて、3月に卒業した生徒達が連絡を取り合って集まり大和八木駅前で募金活動を始めました。本校の生徒達の決断力と行動の速さに感心したことを覚えています。そして、4月には3か月ほど前に本校を訪れた全州権映女子高等学校からも左記のような励ましの手紙と募金も届きました。その後、現役の生徒会役員による校内での募金活動も始まり、合わせて赤十字を通して募金させていただきました。





平成24年度 第3学年主任 円 良純

創立120周年を迎えられたことを、お慶び申し上げます。

『吉野川 その水上を 尋ねれば 雫の雫 花の下露』

吉野川のような大きな川でも、その川上を尋ねていけば、つる草の雫（ムグラ）の雫や、花からこぼれ落ちる露が源になっています。卒業生ひとりひとりの功績が積み重なり、120年という大きな歴史と実績を刻んできたことと存じます。

さて、平成25年3月1日に、歴史と伝統ある畝傍高校で、学年主任として卒業生を送り出せる喜びを与えていただいたことに感謝申し上げます。

振り返ってみると、この年は、本館が近代建築として重要ということで、国の登録有形文化財に登録された記念すべき年でもありました。そして、ルポライター浅見 光彦シリーズ「箸墓幻想」では畝傍考古学研究所として、また、妹尾 河童さんの自伝小説の映画「少年H」では兵庫県立第二中学校としての撮影の舞台ともなった校舎です。

卒業記念として、何を寄贈すべきかというとき、各クラスの代表と話し合った結果、登録有形文化財の登録記念碑をとということになりました。早速、卒業生でもあり大先輩の打谷石材の会長にご相談申し上げたところ、快く引き受けて頂きました。

生徒達に目を向けた時、校外学習、球技大会、体育大会、畝高祭、修学旅行など、楽しかった事が思い出されます。3年になると、各自の進路に向かって日々努力を重ねていました。そんな中、野球部が夏の大会で、31年ぶりに決勝戦進出となり、盛り上がったことを思い出します。そんな夏の終わりには、最後の畝高祭。3年生は食品バザーで、私が試食をして販売許可を出すということで、10クラス分の試食は懐かしい思い出です。そして、クラスで力を合わせ取り組む姿は、感心させられました。

季節も変わり、秋から冬になると、大学入試問題の質問やら面接指導を頼まれたりしましたが、それぞれに先を見据え、目標を持ち、夢を叶えるための心構えができていて、感心させられました。そのような努力が実を結び、進路結果は、なかなかのものであったと記憶しています。そして、卒業してから3年少し過ぎた彼らは、また次のステップへ歩み出そうとしているのではないのでしょうか。健闘を祈りたいと思います。

私自身も、インドやスリランカの地で研修したり、小さな一歩ずつですが仏道を歩ませて頂いています。

最後に、畝傍高校の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。





## その時を一所懸命

第65回(平成24年度卒業) 吉田 有岐

卒業から3年以上経た今でも、ふと、高校時代の話題になると途切れることなく盛り上がる。そんな高校時代を私は畝高で過ごさせていただいた。思い返すと、畝高生時代は実に様々なことに直面し、またチャレンジし、成し遂げていくことができたのかな、と、そして本当に素晴らしい先生方と、一生の友といえる友人と、なによりも一生誇りに思える母校と出逢えた3年間であったと胸を張って言える時代であった。

1年生の頃、さして名の知られた人間でもなかった私が担任の先生に半ば強引に生徒会室に連れてこられ「この子生徒会長立候補します」と、そこから始まった私の生徒会長としての道のり。なった限りはと、ひたすらに走り続けた記憶がある。「生徒の主体性を確立しよう」と当時の生徒会役員全員で通学路清掃の回数を増やしたり、学校説明会の運営を生徒会主体で行ったり、カーディガンの着用を可能にするよう校則を変更したり、タイツの着用許可への第一歩を踏み出したり。畝高祭に向けて毎晩眠らずに取り組んだ日々。東日本大震災の復興ボランティアとして陸前高田市へ行ったこと。時には先生と衝突し地団太踏んだ記憶もあるが、そのようなことを繰り返して私自身大きく成長できた日々であった。

また、廃部寸前の柔道部に入部し、1年生の頃は一つ練習したら30分休憩するというユルさであったが、2年生のときには、初心者4人経験者2人というなか、団体で近畿大会に出場できたのも本当に大きな経験であった。予選で私が負けても引き分けても敗退。勝つしかない、という状況の中、必死だった私は柔道にあるまじき単に押し倒すという斬新な(?)技を繰り出し、意外にも「有効」。そのまま勝利することができたのだ。生徒会との両立に苦しんだものの部員の皆の温かさ(温かすぎといえば温かすぎだが笑)、先生の理解のおかげでやってこれた、と、本当に皆さんには感謝している。

そんな1、2年生を過ごし、ついにやってきた受験生としての3年。私は入学以来「つどい」の常連、「つどラー」であり、勉強なんてこれっぽっちもできなかった。1月になってからも卒業式前日に3年間を振り返ろうと「卒業プロジェクト(卒プロ)」を始動させ、受験勉強そっちのけで転勤された先生のところに行きビデオレターを撮影したり、編集したり。そんな中やってきた前期試験。私は仙台にある大学を受験したのだが、私からのビデオメッセージコーナーをつくるから撮影してこいと、卒プロのメンバーに言われ、仕方なく試験終わりに撮ることに。どうせなら伊達政宗像の下で撮ろうと思い、鞆にビデオと三脚を入れ、重たくなるからと参考書を抜いて会場へ。しかしここでハプニングが発生したのだ。なんと雪の影響で試験時間が繰り下がり、周囲は黙々と参考書を開きはじめるのである。もちろん私はビデオと三脚しか持っていない。やっと試験が始まるかと思ったら、またハプニング。電子機器は全て指定の紙袋に入れるとのこと。配られた袋はどう見てもスマートフォン用でビデオなんて入る大きさではない。静かに手を上げ「すみません。ビデオはここに入りません。」と。なんとか試験も終わりたった一人で撮影し、帰りの飛行機で編集。やっとのことで卒プロをつくり上げた。もちろん試験結果は不合格。生徒会室に屯していた皆が浪人か、現役であってもどこかで不合格を経験するという結果であった。

しかしただ一言、私は確信している。あの時は宝物であると。高校生というその時、その時間を一秒一秒本当に目一杯、一杯に生きていたな、と。誰にも負けない経験を私は畝高を通して手に入れることができたのだ。だからこそ私は現役生に伝えたい。「その時を一所懸命に」そうできる環境が、仲間が、畝高には存在するから。





10年をふりかえって

120th Anniversary

2013





## 畝傍高校での生活と今へのつながり

第66回(平成25年度卒業) 和田真由香

私が畝傍高校を卒業してもう2年と半年が経ちます。卒業してから今まであっという間でした。今回、私の畝傍高校での生活の振り返りを書く機会をいただいたので、私の畝傍高校での生活についてお話ししたいと思います。

私は入学してすぐ吹奏楽部に入りました。そこでの活動が私の高校生活の中心でした。部活動では一生の友人ができましたし、多くのつながりと経験を得ることができました。しかし、苦しいことや悲しいことも多くありました。特に、アンサンブルコンテストに向け練習をしていた高校2年生の冬、私と同じ学年のメンバーが5人同時に部活を辞めた時のことは今でもたまに思い出します。辞めてしまった原因は、受験勉強に専念するためとは限らないようで、それぞれ複雑にあったようでした。私は本人たちから話を聞き、仕方のないことだと諦めてしまい、事実をあっさり受け入れてしまいました。しかし、顧問の先生から「本当にそれでええの？納得してるん？」ということを言われました。先生からのこの問いかけは今でも忘れられません。その時は辞めてしまうということに驚き悲しくて、一杯一杯ということもあり、仕方がないと割り切りました。ですが、3年生になり最後のコンクールを迎えた時、すごく寂しかったことを覚えています。部活はみんなで言うといっても、やはり同学年の仲間がいることはとても心強いことなのだと気づきました。また、辞めてしまった仲間に対してもあの時引き留めて、もっと冷静に話し合いをしていたら…とも今になっても考えてしまいます。

このように考えたり悩んだりすることも多かったのですが、部活動を通していかに多くの人の助けを借りているかも実感しました。顧問の先生のご尽力だけでなく、特に演奏会では多くのOGOBの先輩方が時間を割いて手伝いに来てくださったり、多くのお店に協賛をいただいたりしました。そのようなご協力があり演奏会を行うことができました。ご協力して下さることは当たり前ではなく、本当にありがたいことなのだと、OGになり何かと忙しい今、改めて実感します。忙しくても今までたくさんOGOBの先輩方に助けていただいたように、時間が取れるときは手伝っていきたいと思います。

さて、部活動以外の学習やクラスではどうであったかという、学習に関して言うとは不真面目だったと思います。大学の講義を受けていると、その講義内容と高校で学んだことがつながる時があり、とても楽しいと感じる時があるのですが、その度にもう少し真面目に授業を受けるべきだったと反省もします。クラスの担任の先生は3年間同じで、先生は何かとクラスで交流する時間をよく設けて下さったり、相手を理解し思いやることの大切さを教えて下さったこともあり、みんなそれぞれに生き生きとし優しく、3年間いい雰囲気の中で、とても楽しく過ごすことができました。その先生には卒業した今でもお話や相談をさせていただくこともあり、私にとっては変わらず大切な存在です。

お話ししてきたように、私にとって畝傍高校での生活は悩むことや考えさせられることも多くありましたが、それも含め忘れられない大切な経験です。また、部活やクラスを通してできた友達や先輩、先生とのつながりは今でも深く続いています。これからもこのつながりや経験を大切にしていこうと思います。

平成25年度 第3学年主任 中川 喜次

私は、平成17年4月に畝傍高校へ着任しました。当時の3年生はまだ前の制服で、女子のネクタイが金色であったことが印象的でした。学級数も3年だけが9学級で1年や2年は10学級でした。次の年からは今まで普通教室として使用されていなかった情報教室などが割り当てられました。着任以来1年から3年までを2周り、都合6年間は担任として、そして、平成23年度から平成25年度までの間は学年主任として、最後の2年間は人権教育部長として勤務した後、平成28年3月に退職を迎えました。

さて、主任をさせていただいた学年は、入学当初なかなか学力が伸びず心配が絶えませんでした。やがて高校生活にも慣れ進路講演会や先輩の話聞く会などの進路行事を通して、明確に進路目標を持つ生徒が増えていきました。そして類型選択では、それまで長く続いた文型と理型5学級ずつの体制から、初めて文型4学級、理型6学級に移行しました。また、2年ではこれまでも短期留学を経験した生徒は多くいましたが、1年間の長期留学に2名の生徒が行って来て、その交換としてハンガリーからの留学生を1年間受け入れたのもこの学年が初めてでした。加えて、平成16年度から続いていた北海道への修学旅行や、畝高カラーとも言える臙脂色の体操服での体育大会も、この学年が最後の年になってしまいました。そしてこの学年が卒業した年の4月には、本校のSGH校への指定が決まり、いろいろな学校体制の改善が図られましたので、それまでの本校の特色であった65分授業や2学期制などの中で3年間を終えた最後の学年になってしまいました。しかし、その中においても前述のように、生徒達の理系指向やグローバル化などの変化が静かにではありますが着実に進行していった時期でした。

学校は、朝早くから、学級の机や椅子を整えておられる担任の先生方や、進路室の前で開館前から待つ生徒、階段や廊下の隅にそっと花を生けてくださっていた業務員さんの姿があり、そして放課後は夜遅くまで部活動に汗を流す多くの生徒、図書室や進路室で閉館まで学習する生徒の姿など、日常の変わらぬ伝統が息づいていました。そんな学校で素晴らしい生徒達や先生方と最後に過ごせたことに今更ながら感謝しています。



## 生徒とともに

平成26年度 第3学年主任 盛口 佳昭

奈良県立畝傍高等学校創立120周年おめでとうございます。

私は、平成21年に着任以来、9年間お世話になっております。その間畝傍高校ですばらしい多くの生徒と出会い、共に高校生活を過ごせたことに感謝しています。

9年間で、平成24年3月に入学した生徒達に学年主任としてかわらせていただいたことが、最も印象に残っております。この3年間では、いろいろなことがありましたが、最大の思い出は、例年行われてきた北海道への修学旅行を九州方面へと見直したことです。奈良県には無い壮大な大地・自然にふれるこの北海道への修学旅行は、卒業生達の評判も良かったのですが、航空機の費用の問題、航空機の小型化による定員の問題、空港でのセキュリティ対策による時間の問題等があり、行き先も含めた大幅な見直しを余儀なくされたのです。最終的には、九州新幹線が開業したこともあり、九州方面となりました。私は、上記の問題点は十分理解できたのですが、生徒たちの落胆する様子が目に浮かび、とても悩みました。1年の1学期に学年集会でこの事を説明し、保護者の皆様にも文書で説明させていただきました。「残念だ」というご意見もありましたが、実際には1年生の先生方と生徒達が、ホームルーム等を通してこの事を前向きにとらえ、自分たちが新しく修学旅行を作ろうという雰囲気生まれたのです。無事2年の1学期に九州への修学旅行を終え、その後のアンケート結果も非常に良かったので、ほっとしたことを昨日のこのように覚えております。あらためて畝傍高校生の、新しいことへ前向きに取り組む姿勢のすばらしさ・エネルギーを感じました。

第67回卒業生の皆さんに卒業にあたって贈った言葉「大海を知ろう」をもう一度贈りたいと思います。

最後になりましたが、畝傍高校の今後益々のご発展を祈念いたします。

2014





## 第67回(平成26年度卒業) 矢萩 拓

敵傍高校は僕にとって憧れの場所でした。年上の従兄弟が二人僕より先にこの高校に入学し、卒業していきました。仲の良かった中学の先輩も多く敵傍高校に入り、家からも近かったこともあって絶対自分もここに入るんだと強く思ったのを今でも覚えています。

無事入学し、夢見た高校生活は素晴らしいものでした。戦時中から残る歴史ある校舎の趣深い景観に包まれて過ごす学生生活は敵傍高校でしか味わえないものだったと思います。文化創造館や学食などの施設に恵まれ、文武両道の精神に表れるように学業、部活共に精を出し、野球部は県大会決勝進出、音楽部も全国大会出場など輝かしい功績を残していました。

創立120周年記念事業として新たにトレーニング設備の充実化が実現すると聞いていますのでより一層の母校の運動部の発展に期待しているところです。

高校時代の一番の思い出といえばやはりなんといっても敵高祭です。僕は生徒会役員として前期後半から同じ役員と共に一心不乱に準備に勤めました。

はじめての大きなイベントを一から作る楽しさと責任感にわくわくし、企画や進行内容に頭を悩ませていた日々がつい昨日のことに思い出されます。僕は敵高祭での企画映像とパワーポイントを担当しました。1分の映像を作ることに何時間もかかったり、どうすれば分かりやすく面白い動画が作れるか、どうすればみんなを楽しませる企画になるかなど毎日が課題の連続でした。その分一つ動画が完成するたびに感じた達成感は凄まじく、見る人がどんなリアクションをするのかすごく楽しみにしていました。また企画に参加してくださった先生方や生徒の皆さんと共に映像を作り上げていく中でたくさんの人と交流し、試行錯誤を重ね、面白いものをつくるといった経験は今でも自分の人生の中で大きな存在として残り続けています。

僕たちの代である67期生はいよいよ今年度成人式を迎えます。敵傍高校で培われた経験と、仲間と共に過ごした青春の思い出を胸に、まだまだ就職難に喘ぐ苦しい時代ではありますが新成人としてこれからの多種多様な社会での同期生たちの活躍に心からの期待を寄せるばかりです。





第68回(平成27年度卒業) 野原 花恵

私は畝傍高校に通うことができて本当に幸せだったと、今でも毎日のように思う。いつも笑顔があふれていた教室、何事も全力な友達、いつも寄り添ってくださった先生方……。どの場面をとっても私の宝物のようである。そんな中で私の畝傍の思い出として一番大きく占めているモノは部活である。私は陸上競技部だった。陸上は高校に入ってから始めた。何をしたら良いのか、どんな靴を履けば良いのかなど全く分からなかった私に先輩方や陸上を経験したことのある同級生が丁寧に教えてくれた。入学したてであり、さらに周りに陸上経験者ばかりいて不安でいっぱいだったためこの優しさを感じ「ああ、畝傍にきてよかったな」と思った。陸上は個人競技なので同じチーム内でもライバルになる。時には私たちもチーム内でピリッとした空気になることもあった。しかし3年生になり最後の試合を迎えたとき、互いに励まし合ったり喜び合ったりしている姿を見たりし、「この部活に入れて、畝傍高校で、このメンバーで陸上ができるよかったなあ」と感じる事が出来た。

また畝傍の校舎で過ごせたことも私にとって思い出である。3年生の受験期に友達と夜まで教室で勉強していた時、木の枠で囲まれた窓に夕焼けが映っていたのをよく見た。何気ない風景なのだがすごく美しい景色であり、心がジーンとなっていた。また普段の授業風景も好きであった。通常より大きな黒板や移動する度にギシッという床などがある環境で勉強が出来るのは畝傍の魅力である。「こんな綺麗な景色や授業風景を見られるなんて、畝傍にきてよかったな」と思った。

このように「畝傍高校に通えて良かった」と今でも感じる瞬間が沢山ある。3年生での体育大会では各クラスが優勝を目指して全力で、無我夢中に競技に取り組んでいた。どの子も笑顔であふれていて「競争」というより「全員で楽しむ」といった思いで皆参加していた。

文化祭でも、クラス内ではもちろん学年を通して協力したり、エンディングではみんなで歌ったりと行事がある度に学年が、学校が一つになっていた。

行事の写真を見返す度に私は、あの時間をもう一度経験できたらなあと思う。そんな思い出にさせてくれる畝傍高校に3年間通うことができて本当に良かった。

2015





## 伝統に支えられた畝高での日々

平成27年度 第3学年主任 小谷 修也

奈良県立畝傍高等学校が創立120周年を迎えられますことに、心からお祝いを申し上げます。

私は昨年度まで6年間お世話になりました。最初の3年間は学級担任として、後の3年間は学年主任として勤務させていただきました。

平成25年度は1年生の学年主任としてスタートしました。このときはまだ、2期制、65分授業でした。夏期休業も8月末までではなく、エアコンをつけても汗がにじみ出るような真夏の暑さの中、8月の授業を行っていました。秋の畝高祭が終わり、前期が終了しました。そして後期に入り、生徒たちが文型、理型の選択をし、自らの目標を定め、しっかりと勉学に励んでいた姿を思い出します。そんな中、SGHの指定に向けた取組が開始されたのを覚えています。

さて、次の年は続けて2年生の学年主任をさせていただきました。一番、変わったことは、やはりカリキュラムの変化でしょう。新1年生は、いくつかの学校設定科目が入りました。また、65分授業から50分授業になりました。65分授業に慣れていて2、3年生の生徒たちには、多少の戸惑いもあったかもしれません。教員の私も65分に慣れていたので、1学期当初は50分でうまくまとめられなかったり、試行錯誤いたしました。しかし、それに慣れ始めた頃、九州への修学旅行がありました。クラスごとに計画を立て、生徒自ら主体的に企画した思い出深い旅行となりました。2学期には、総合的な学習の時間で、京都大学名誉教授で歌人の永田和宏先生に来ていただき、人生におけることばの大切さ、人とつながりの大切さを教えていただきました。その後、伝統ある畝傍高校の卒業生で、各方面でご活躍の方々に来ていただき、「職業人から学ぶ」という講演会を初めて開催しました。医師、教員、薬剤師、エンジニア、商社員、国家公務員など様々な職種の方に来ていただき、仕事のやりがい、おもしろさについてわかりやすくお話しいただきました。生徒が自分の将来を切り開く原動力になったと感謝しております。この時ほど畝高伝統の重み、ありがたさを感じたことはありません。

3年生になり、生徒全員、自らの進路目標に向かって受験勉強を始めました。この年から3学期制に移行しましたが、運動部や文化部で一生懸命がんばっていた生徒も1学期でほとんど引退し、本格的に勉強が始動しました。そして、2学期の始め「大学での学び」について京都大学教授の溝上慎一先生に来ていただき、「主体的に積極的に学ぶことが大切であること、決して大学合格がゴールではないこと」を中心にお話しいただきました。そして、入試本番の3学期、センター試験の応援で天理大学へ行きました。「みんな成功してほしい」という思いを抱きながら、生徒たちを見送りました。そして3月の卒業式。

3年間を振り返りますと、あっという間でした。そして中身の詰まった日々でした。様々な学年の行事を実施するとき、畝傍高校の卒業生の方々に来ていただいたり、畝傍高校に長くお勤めの先生方から助言していただいたり、私自身が伝統に支えられた3年間だったと思います。

これからまた、新たな伝統を作るべく、SGHの取組も順調に進んでいます。今まで培われたものに支えられ、また新たなものが作り出される。この好循環は未来永劫にわたって続いていくことでしょう。私自身もこんなすばらしい学校で勤められたことを誇りに思い、これからの人生を送りたいと思います。







# 2016





## 畝傍高校創立120周年によせて

第69回(平成28年度卒業) 萩岡 創

本校は今年度、記念すべき創立120周年を迎えた。これまで本校の運営に携わり、本校発展の礎を築いてこられた方々に在校生を代表して敬意を表すと共に、偶然の巡り合わせとはいえ、この記念すべき年度に在学していることに本校との縁を感じている。

私は平成26年度に本校へ入学した。入学式当日は、輝かしい高校生活への期待と新しい生活環境への不安という正反対の気持ちを抱えながら、式へと臨んだことを今でも覚えている。また、平成26年度は本校が文科省よりスーパーグローバルハイスクールに指定された初年度であったが、入学するまでそのことを全く知らなかったため、関連事業やカリキュラムに大変戸惑ったこともあった。あつという間に入学から一年が経ち、第2学年に進級した私は、生徒会長を務めることとなった。生徒会活動を通して人前で話す力を身につけられたのは勿論のこと、信頼できる他の役員と共に活動に取り組み、成功を収められたときの達成感、充実感は今でも心に強く残っている。シンガポールへの海外研修旅行では、自分自身初の海外渡航ということもあり、なかなか勝手がつかめなかったが、日本国内ではなかなか味わうことのできない海外の文化に触れ、自らの見識を深めることができた。そして、畝高生活も最後となった一年、第3学年での最大の思い出は、なんといっても畝高祭である。自分たちで企画から販売まで全てを行った模擬店の成功に加え、オープニングやエンディング、さらにエンディング終了後も盛り上がり続け、2日間目一杯楽しんだ記憶はおそらくずっと残り続けるであろう。

高校3年生の秋も深まった今、これまでの高校生活を振り返ってみると、私はこの3年間で数多くの思い出を作ることができた。行事の思い出も多数あるが、日常生活やたわいない会話などもかけがえのない思い出の一つである。そして、それらのよき思い出はいくら時間が経っても決して色褪せることはない私は確信している。また、多くのよき思い出を作ることができたのも、ひとえに良き友人たちのおかげである。3年間の高校生活で、私は何物にも代えがたい友人を多数得ることができた。彼らと共に日々の生活を送り、共に様々な体験をしたことは私の一生の財産である。

最後に、近年社会は国の内外を問わず劇的な変化を続けている。そして我々は、その激動の社会の中でしっかりとしたビジョンを持ち、一步一步確実に前へ進んでいかなければならない。そのような時代において、伝統ばかりにすがっていたならば、本校の未来は明るくないと言わざるを得ないだろう。「進化する伝統」のスローガンのもと、この畝傍高校が伝統ばかりにとらわれず、移りゆく時代に合わせ絶えず進化を続けていく誇りある母校であることを、私は強く願っている。

## SGHに取り組んだ3年間

平成28年度 第3学年主任 駒井 彰

奈良県立畝傍高等学校が創立120周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

私は平成24年度に畝傍高等学校での勤務を命ぜられ、5年間勤務しております。本年度までの3年間は学年主任として多くの素晴らしい生徒達に出会い私自身が成長させていただいた事、学年の諸先生方に支えられ過ぎてこれことに感謝しています。

高69期生が入学した平成26年に文部科学省からスーパーグローバルハイスクールの指定を受け、使命感と実行力及び国際感覚を身に付けるべく、課題研究や国際交流及び新たなSGH関連の科目に取り組みました。

特に、『奈良発!“未来”を“創造”するグローバル・リーダー育成プログラム』の中で印象に残っているのは、グローバル国語で実施した『ディベート』、シンガポールとマレーシアを訪れた『海外研修』、及び3年間の総決算として開催した『未来創造会議』の3つです。

『ディベート』はある論題に肯定側と否定側に別れ、交互に根拠を示しながらの主張や質問や反駁を行うのですが、早口で時間内に議論し合う様子は堂々としており、その飲み込みの早さに頼もしさを感じました。

『海外研修』では、初めて日本を離れる生徒も多く、異国の文化を肌で感じたことは貴重な経験であったと思います。マレーシアでは現地の高校生や大学生と交流しました。各班に分かれて、プレゼントの交換やそれぞれのテーマに関するディスカッションを行い、コミュニケーションの大切さ、異国の友人ができた喜び、もっと親しくなるために英語を勉強したいという意欲を感じてくれました。

『未来創造会議』ではすべて英語で進みました。3つのグループが今までの研究の成果を英語で発表し、神戸大学等への外国人留学生からの質問やアドバイスを受け、最終提言を行いました。質問に戸惑いながらも返答する代表者達は楽しげで誇らしげでした。文化創造館に居ながら異国の空間を感じつつ、今後、生徒達が世界で活躍する姿が脳裏に浮かぶことでSGHと共に歩んできた日々を思いだし胸が熱くなりました。

第69期生にとって、これらの貴重な経験が各々の人生に生かされ、奈良県のみならず世界のリーダーとして活躍してくれることを願いますと共に、益々の畝傍高校の発展をお祈り申し上げます。



## 定時制

### 思い出

定時制元教頭 風味 眞幸

畝傍高校創立120周年おめでとうございます。

私が畝傍高校定時制に勤務していたのは、新任教員として昭和51年4月から昭和55年3月までの4年間と、教頭として平成24年4月から平成26年3月までの2年間でした。教員生活の最初と最後を畝傍高校定時制に勤めるとは不思議とご縁があるのだなあと思いました。

まずは新任教員としての4年間の思い出です。最初の赴任校はどの教員にとっても、とても印象深いものだと思います。当時は各学年2クラスで約230名の生徒が在籍し、入学式は全定合同で卒業式は別々で行っていました。生徒は、ほとんど正社員でアルバイトは少なく、男子は製造関係、女子は准看護師が多かったように思います。それで、職場との連携を密にし、職場の高校への通学の理解を深めてもらうために職場訪問を行っていました。そこで、生徒たちが真剣なまなざしで仕事に取り組んでいる様子を見て、学校生活ではわからない一面を発見することができ、生徒理解に役立ちました。

3年生の担任のとき、秋に南九州にフェリーさんふらわあで4泊5日（船中泊2日）の修学旅行に出かけました。当時の定時制は4時間授業で休憩時間5分、給食（パンと牛乳の補食）の時間は15分でした。部活動をしていない生徒は授業が終わるとすぐ下校するので、生徒同士が話し合う時間はほとんどなかったため、修学旅行中は夜遅くまで話をして、仲間意識がより強くなりました。

4年生の担任のとき、クラスの生徒が奈良県高等学校定時制通信制生活体験発表会に出場して、最優秀になり、東京で行われた全国大会に出場したのは、とても嬉しい思い出です。そして、卒業していった生徒たちとの交流は今でも続いています。

定時制に教頭として赴任したとき、「また戻ってきた。」と思い、校舎を見て懐かしく感じました。生徒数は各学年1クラス約80名で、私服での通学が可能になっていました。そして生徒の顔を覚えるために、登下校時、毎日先生方とともに校門に立って挨拶の声をかけをしました。特に、登校時のようすを見て、その日の生徒の雰囲気少しわかり、生徒理解につながりました。生徒の実態としては、アルバイトをしている生徒が多いように思いました。

また、放課後に、生徒会役員たちが相談できる時間が限られている中で、ボウリング大会、文化祭を生徒会主催で行っています。

本校は普通科ですが、ビジネス基礎、簿記といった実社会に密着した商業科目を履修できる教育課程を編成しています。基本的に定時制課程は4年かけて卒業するのですが、本校定時制での学習に加えて高等学校卒業程度認定試験を受験するか、奈良県立大和中央高校通信制課程で併修して、4年間で学習するべき単位数を自分で学習し修得して3年間で卒業することができるようにしています。このことを利用して毎年数名の生徒が3年生で卒業していきます。

今も昔も様々な事情で定時制に通学している生徒がほとんどです。そしてまじめに頑張っている生徒たちのためにも教員がいろいろな指導や支援していかなければなりません。

私の教員生活で定時制で勤務したことは、とても貴重な経験、そして人間として生徒たちから多くのことを学ばせてもらいました。森田校長・福田校長先生はじめ、同僚の先生方には大変お世話になり、ありがとうございました。そして、畝傍高校定時制の更なる発展充実を願っています。





## 2年の日々を振り返って

定時制前教頭 大山 茂樹

創立120周年おめでとうございます。

私は、平成26年4月から28年3月までの2年間で、敵傍高校定時制課程で過ごさせていただきました。定時制に勤務するのは初めてであり、また教員生活の最後でもありました。

生徒や学校の様子、勤務体制、日々の生活のリズム等の個人的なことまで、今までとかなり違う毎日の中で、新しい経験、驚きの連続でした。たった2年間で、新しい生活のリズムに慣れるということはどうとうなかったのですが、その短い期間であっても、様々な生徒に接する中で非常に多くのことを学ばせてもらいました。

他校を中途退学してきた生徒、中学校時代なかなか登校できなかった生徒、経済的な理由から働きながら学ぶことを選んだ生徒、一度社会へ出た後学び直しとして入学してきた生徒など、本当に多様な生徒がいました。

どの生徒もそれぞれが目の前の生活、困難と向き合い、なんとか乗り越えるべく頑張ろうとしている姿勢には、自分自身を振り返りつつ頭の下がる思いがしました。そして、生徒がそれぞれの壁にぶつかりながらも、抱える課題を乗り越え卒業していく、その達成感と希望に溢れる喜びの姿には、教師冥利に尽きるとも大きな感動を与えてもらいました。定時制課程の存在の大きさと必要性を改めて認識させられたとともに、置かれた環境の中で、自分としてどのように考え、どのように折り合いをつけながら生きていくのか、自分自身の生き方を大いに考えさせられた日々でもありました。

自分も社会もなかなか先の見えにくいこの時代に、敵傍高校定時制課程に学ぶ全ての生徒が、力強く明日を切り開きながら未来に輝くことを強く願うとともに、教職員の温かい指導の下、創意工夫を重ねながら、学校が益々充実、発展されることを心よりお祈りしております。





## 『祝、畝傍高校創立120周年』

全日制生徒会役員 山本 蓮

こんなフレーズを耳にしても、今の僕には全く実感がわからない。『創立120周年記念式典』も行われたが、「わざわざ創立記念日に学校に行かないといけないのか、面倒くさいな」程度にしか感じなかったし、「そもそも120周年だから何なのだ」と言いたくなった。つまり、畝傍高校の一生徒としては創立120周年だからといって特に感慨はないし、実際にそのような声が多い。でもそれは、私たちがまだ若いからだと思う。日本や世界の歴史で見れば、120年間というのは短い期間かもしれないが、今の日本に120年続いたものがどれだけあるだろうか。僕たちが思いつくものは決して多くはないが、それは伝統であったり、会社であったり、様々なものがあるだろう。そして、それらはどれも素晴らしいものであり、たくさんの人々の想いと共に受け継がれてきたものだ。私たちは、地元の伝統ひとつとっても、当たり前ものとして考え、その素晴らしさをあまり感じる事ができていない。伝統というのは一人歩きするわけではなく、人から人へと伝えられる。だから、長い歴史があるものはそれだけ多くの人々が携わってきたことになる。そういう意味で『畝傍高校創立120周年』というのは、120年間の人々の軌跡である。私たちが大人になり、そのことのすばらしさがわかった時、「畝傍高校120周年という年に、畝傍の歴史に携わることができて本当に良かった」と思えるだろう。

